

CAROWAA

CAROWAA — ちゃろわ

アチヨリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィスの現地スタッフが名づけてくれました。ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。



北部ウガンダ農民生計向上プロジェクト、いよいよ始動！

「北部ウガンダ農民生計向上プロジェクト(NU-FLIP)」



Gulu県から提供されたプロジェクトオフィスの正面。隣は農業普及員のオフィスであり密接な連携が期待されます。

アチヨリ地域の地方政府農業関係者が待ち望んでいた北部ウガンダ農民生計向上プロジェクト(通称、NU-FLIP)が、昨年12月4日、5名の専門家のグル着任をもって開始となりました。本件プロジェクトに係る基礎情報調査は、2014年5月に実施され、同年8月には、ウガンダ政府から日本政府に正式要請書が提出、更にJICA本部での検討を経た昨年4月には詳細計画策定調査が実施、8月には両国政府間の討議議事録(R/D)が署名、その後、専門家公示を経て、11月には株式会社JINがJICAとのプロジェクト業務実施契約が締結されるなど、まさにとんとん拍子でプロジェクト開始に辿り着いたこととなります。



オフィスから眺めるGuluの町並み。オフィスは、カンバラグル道路の起点となる一等地にあります。



Gulu中央市場で農業普及員の話に耳を傾ける専門家チーム

この間、アチヨリ地域においては、昨年3月に全7県の生産局長、農業課長、市場課長を対象としたワークショップが農業省と共催で実施されプロジェクトコンセプトの妥当性が確認される一方、R/D締結後においては、本プロジェクトで優先的ターゲットとなるグル県、キトゥグム県、パデル県との間で、それぞれの役割を記載した合意議事録(MOU)が署名され、プロジェクトの円滑なスタートに向けた準備が整えられました。



Gulu県Unyama郡の野菜篤農家を訪ねて情報収集する専門家チーム



パデル県が主宰して開催されたプロジェクト発足式。中央に、CAO、LC5、RDCの3巨頭が並んで座っています。

MOUの中には、日本人専門家とともにプロジェクト推進の中核となる農業普及員の早期採用、プロジェクト事務所の提供、本件プロジェクトの県開発計画への反映、計画局、保健局など含む生産局を越えた全県的対応が謳われました。

本件プロジェクトでは、3県の中から直接の支援対象とする農民グループを選定、日本人専門家と農業普及員が中心となり、各種野菜の栽培技術を確定、更に、市場との関係を深化させた上で、「作ったものを売る」というこれまでのやり方を「売るものを作る」に変革させることを目指しています。ケニアで成功を収めたSHEPアプローチの適用です。

加えて特徴的なことは、プロジェクト対象農家の収入向上に留まらず、



農畜水産省から参加したジェームズ氏の挨拶。プロジェクトの中で国が果たす役割について説明しています。

農家家族の栄養レベル改善、ジェンダー間のバランス配慮、農家経営センスの醸成などを通じ農家の生きる力を引き出すことを究極の目的としていることです。生計向上プロジェクトと称される所以でもあります。

アチヨリで地域では、ウガンダ政府による平和・復興・開発計画の実施などによって道路、学校、保健所、給水等のインフラ整備が急速に進みましたが、貧困レベル以下で生活する住民の数は、いまだ全人口の40%を遥かに超えている他、貧困人口の絶対数が過去6年間で逆に増えたとの調査結果も出されています。住民全体の85%を越える農家にとって、財布の中がすかすかの状態が今も続いているのです。

アチヨリ地域の住民が一日も早く、より平和で、より快適な生活を享受できるよう、本件プロジェクトがその一翼を担うことに大きな期待が掛けられています。

アチョリ地域開発計画策定能力強化プロジェクト(ACAP)が終了

2011年11月に開始されたACAPプロジェクトは、2015年11月24日に4年間のプロジェクト期間が満了し、その幕を閉じました。この間、久保リーダーを始めとした長期専門家4名、開発計画策定支援分野を始めとした短期専門家15名が一般渡航規制のかかる何かと不自由なアチョリ地域でのプロジェクト活動に邁進されました。

本プロジェクトは、20年以上に亘って不在であったアチョリ地域の地方政府の行政能力を強化させることを目的に、コミュニティ開発計画の策定とコミュニティ開発事業実施の両面で、地方政府職員の能力開発に取り組みました。とかく、他のドナーが箱物や物品の供与など安易な支援に流れる中、ACAPでは、行政官の仕事のやり方を変えるというソフト面に力点を置き、見事にプロジェクト目標を達成しました。中でもコミュニティのニーズを拾い上げ、それを客観的、合理的に優先付けし、選定に漏れ



パイロットプロジェクトで掘削された井戸。住民によって大切に管理・使用されている。



Pader県で実施されたプロジェクト最後のTechnical Working Group会合。

た提案事業に対しては、理由を明示したフィードバックを行うことなどによって、納得感の高い事業選定、実施プロセスを確立しました。また、これを通じてコミュニティの住民と行政との間に信頼関係を生み出したことも本プロジェクトの成果の一つとして高く評価されました。

この計画策定手法は、当初、優先県とされた4県から他の3県に広げられ、最終的にはアチョリ地域の全県で採用されるまでになりました。また、ACAPで開発された計画策定補助ツールは、ウガンダ国家計画局からも注目され、現在、計画中のACAPの第二フェーズでは、新たに西ナイル地域8県に導入することが検討されています。

一方、コミュニティ開発事業実施能力強化の観点から、井戸掘り及び生計向上分野のパイロットプロジェクトが実施されました。特に、井戸掘り事業においては、JICA資金を各県が開設した特別銀行口座に振り込み、その資金を

県職員が直接、扱うことで、公金管理の実地体験を積ませることが出来ました。対象4県の何れでも都合3年度に亘ってこれが実施されましたが、資金管理のやり方が年を追って上達し、ある県においては、他ドナーの資金も扱えるほどに、信頼を勝ち得ることが出来ました。

グル市の山の手に置かれたJICA-ACAPオフィスは、既に、その看板が下ろされました。しかしながらACAPで使用された4台の4輪駆動車、2基の非常用ジェネレーターのような大型機材の他に机や椅子、キャビネットなどが昨年12月に始まった生計向上プロジェクトや本年半ばに開始される予定のACAP2に引き渡されることになっています。

北部ウガンダで初めて実施され、地方政府関係者から大いに賞賛されたJICA技術協力の心と技が他のプロジェクトにも引き継がれ、地方政府職員とともに、アチョリの住民の背中を押し続けて行くことを心から祈っています。



プロジェクトの成果品の一つ。4年間の成果、教訓をまとめたハンドブック。

国際幹線道路整備の効果発現速度は想像以上！

Atiak-Nimule間道路改修計画



雨期には冠水していた道路は2m近くかさ上げされ、排水のため広い水路が作られた。また同じく水浸しになっていた道路脇の商店の環境も大きく改善された。



Atiak-Nimule間道路の改修工事は、道路の本体部分の工事がほぼ終了し、側溝や、ガードレール、路側帯、マーキングなどの仕上げが始まっています。工事は雨期になると何度か通行不能になり、南スーダンへの輸出用の農作物が腐るなどのニュースが聞かれたこの道路ですが、12月までの昨雨期にはそのようなニュースも届かず、悪路のせいで近くて遠かった南スーダンは、グルから車で2時間の本当に近い国になりました。

道路のみでなく、沿線もかなりの速さで変化しています。面倒な出入国手続きを待つトラックが数キロにもわたり連なっていた国境の町Eleguでは、手続き簡素化のためのOne Stop Border Pointの建設が始まり、また配電網もついにここまで届きました。この道路によって北部ウガンダは、また大きく変わろうとしています。(右上写真: One Stop Border Pointの工事看板)



JICA北部ウガンダ復興支援プログラム(REAP)と グルフィールドオフィスの6年

1980年代から20年以上に渡る内戦によって、200万人以上とも言われる住民が国内避難民(以下IDP)としての生活を強いられてきたウガンダ北部地域。JICAグルフィールドオフィスは、緊急の人道支援フェーズから復興支援フェーズへの移行期にある同地域に対して、切れ目のない支援を実施することを目的に、2009年8月に、北部ウガンダ復興支援プログラム(REAP)の活動拠点として開設されました。

開設当時は、グルという町そのものの情報もほとんどなく、今よりさらに不安定な電気・通信事情の中、手探りで執務環境の整備、情報収集を行うところからのスタートでした。

最初に行われた開発調査型技術協力プロジェクトでは、IDPの元の生活の場への帰還と定住を支援するために、道路網の調査と、コミュニティ再開のためのパイロット事業を伴った調査が行われました。

●アムル県総合開発計画策定支援プロジェクト Project for Rural Road Network Planning in Northern Uganda (RRNPN)

●アチョリ地域地方道路網開発計画プロジェクト Project for Rural Road Network Development in Acholi Sub Region (RRNDA)

●アムル県国内避難民帰還促進のためのコミュニティ開発計画策定支援プロジェクト Project for Community Development for Promoting Return and Resettlement of IDPs (CDRET)



CDRETで建設されたAmuru県Pabbo郡の職員住居。(2016年1月撮影)

REAPの3本柱のうちの2つ、1. 基礎インフラ整備、2. 地方行政能力強化のためのプロジェクトは、これら開発調査から発展していきました。

開発調査が始まった頃は、鈍かった帰還の動きは、2011年を境に急激に進み、定住促進支援のための基礎インフラの整備が急務となってきました。

【1. 基礎インフラ整備】

●北部地域国内避難民帰還促進のための生活基盤整備計画(平和構築無償)

Project for Social Infrastructure Development for Promoting Return and Resettlement of IDPs in Northern Uganda (INDEP)

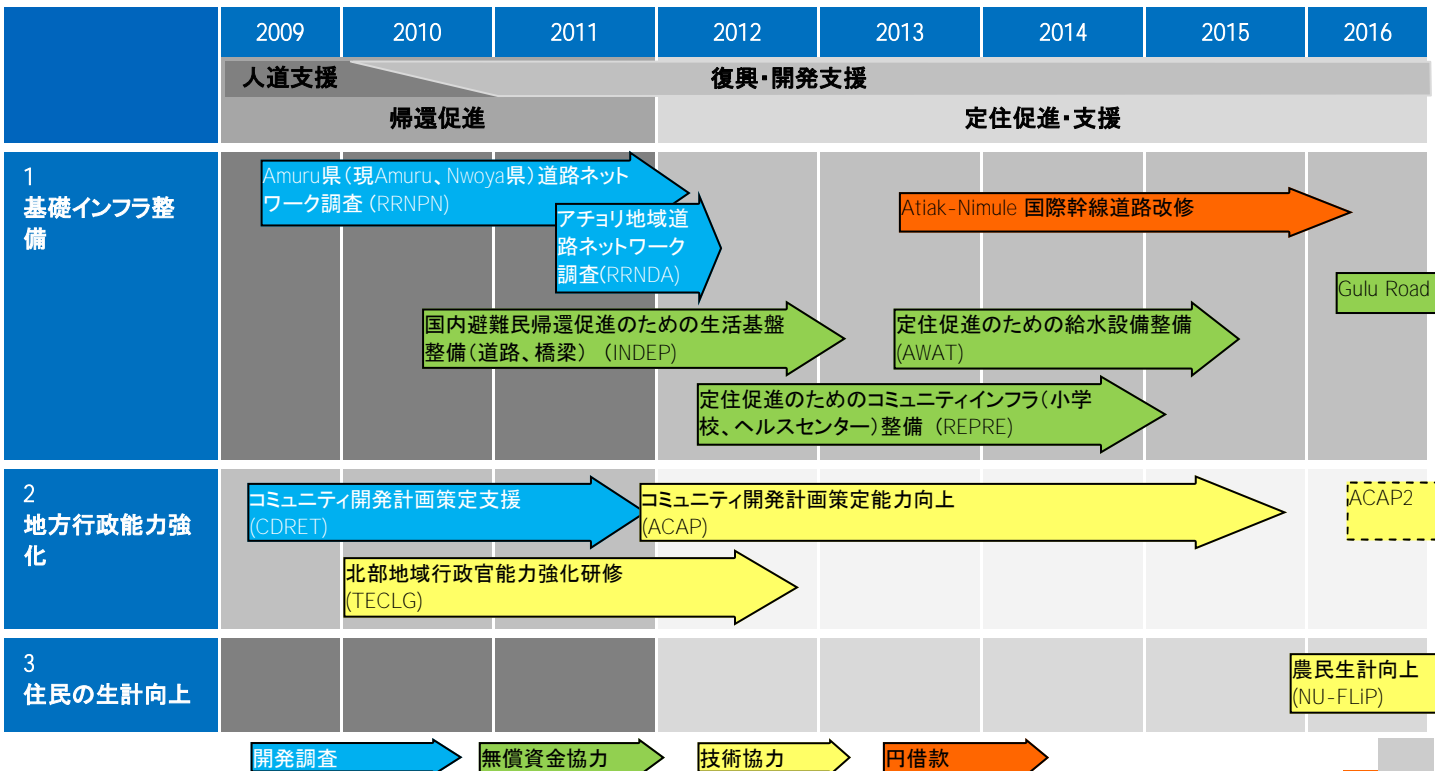
・橋梁6本 ・舗装道路11km ・コミュニティ道路74.1km



INDEP: Agago県Otaka橋。現在は、長距離バスの経路にもなっている。(2015年12月撮影)

●ウガンダ北部アチョリ地域国内避難民帰還・再定住促進のためのコミュニティ再建計画 Project for Rebuilding Community for Promoting Return and Re-settlement of Internally Displaced Persons in Acholi-sub Region (REPRE)

・35小学校に108教室、114世帯分の教員住居、55棟のトイレ ・3ヘルスセンターに外来棟と医療器具 ・施設への12本の井戸と64kmのアクセス道路



JICA北部ウガンダ復興支援プログラム(REAP)と グルフィールドオフィスの6年

●アティアクニムレ間道路改修計画

Upgrading of Atiak-Nimule Road Project
・世界銀行との協調融資。世銀区間Gulu-Atiak、日本区間Atiak-Nimuleで、Guluから国境までの約100kmの改修が行われている。



工事は仕上げの段階に入り、ガードレールなどの取り付けが始まっている(2016年2月撮影)

●アチヨリ地域国内避難民の定住促進のための地方給水計画

Project for Provision of Improved Water Source for Returned IDPs in Acholi Sub Region (AWAT)



給水ポイントで水を汲む住民(2015年3月撮影)

・アチヨリ7県の75村に井戸75本、人口の集中する商業センター6ヶ所に管路給水設備

【2. 地方行政能力強化】

●アチヨリ地域コミュニティ開発計画策定能力向上プロジェクト

Project for Capacity Development in Planning and Implementation of Community Development in Acholi Sub-Region (ACAP)



●「ウガンダ北部地域行政官能力強化」研修 Training on Enhancement of Capacity for Planning for Local Governments in the PRDP District (TRCLG)本邦研修

これらREAPの事業に対し、2014年に行われた中間評価では、次のよう評価されました。

- ① 道路、橋梁、コミュニティスクールの建設等を通じて国内避難民の帰還・定住を後押し
- ② 開発調査を通じ中長期的視野に立った地域開発モデルを提示
- ③ 日本による援助の特長を具現化

* 質の高い成果品(建築物など)

* 持続性・オーナーシップ・機能性を考慮

* 事業実施を通じたウガンダ側関係者への技術移転

加えて、プログラムの仕上げとしての3本目の柱、住民の生計向上に対するプロジェクトの重要性が再度指摘されました。

【3. 生計向上】

ACAPでも、生計向上に関するパイロットプロジェクトが行われましたが、2015年12月より、5年間の計画で農業を通じた生計向上のプロジェクトが始まりました。

●北部ウガンダ農民生計向上プロジェクト Northern Uganda Farmers' Livelihood Improvement project (NU-FLiP)が始まりました。

Guluを中心にした北部ウガンダは、ウガンダ南部に追いつくべく急速に発展が進んでいる地域というのみではなく、南スーダン、コンゴなど不安定な近隣国にとっての安定した物流拠点という意味合いがますます大きくなっています。

3年前は、車で約7時間かかっていたKampala-Gulu間の道路は、ほぼ舗装が完成し、5時間弱の道のりになりました。これからはウガンダ事務所が、あたらな方向性を見据え、かつ、内戦影響下の地域であることも忘れることなく、ウガンダ北部への協力を続けていきます。

ウガンダ大使のグル訪問

2016年2月15日、在日本ウガンダ大使のBetty Akech氏が、グルオフィスを訪問されました。Akech大使はグル出身、JICAの北部ウガンダ支援についてご

存じではあったとのことですが、詳細については知る機会が無かったため、今回の休暇帰国を利用して、是非訪問したかったとのこと。グルオフィスからは、JICA-REAPについて説明させていただき、Akech大使からは、彼女の感じる北部ウガンダの課題や、日本に対して感じる事など、ミーティングは2時間近くに及びました。「日本人は用心深く、リスクを回避する傾向があるので、ウガンダにもなかなか来てくれない。しかし、ウガンダはとても可能性のある国です。もっともっとウガンダに興味を持ってきて欲しい」ウガンダに興味がある皆様、是非ウガンダ大使館を訪ねてください。

<編集後記>



約6年にわたり北部ウガンダでその激変期とともに過ごしてきたグルフィールドオフィスは、2016年3月31日をもって、その役割を終え、カンパラのウガンダ事務所にすべての業務の移管を完了しました。

これまでここで勤務したスタッフ、北部ウガンダに調査に入られた方々、REAPのプロジェクト関係で駐在された専門家、コンサルタント、施工業者の方々、そしてウガンダ人の関係者、そんな多くの方々に支えられ、REAPも、フィールドオフィスもここまでやってまいりました。

このオフィスが役割を終えるということは、北部ウガンダの復興・発展が新たなレベルに入ったという、とても素晴らしいことだと思います。これまでフィールドオフィスおよび、本ニュースレターをご支援いただきありがとうございます。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

そして、今後ともよろしくお願いいたします。

完 グルフィールドオフィス

ちょっとだけ番外編！ ニュースレター本文にはなかったプロジェクトのこぼれ話など

ウガンダでの式典は、予定された時間に始まることは稀、というのが、多くの人の認識です。9時から開始と言われると、参加者も「どうせ11時だろう」と考えて、9時になど集まりません。準備する方も、「参加者もどうせ遅れてくるのだから」と、時間通りに準備したりしません。

しかしながら、地方給水プロジェクトの引き渡し式典では、水環境省関係者の方は元々そういう認識を持っているのか、日本人が時間に厳しいと知っているからなのか。いつものように、式典開始予定時間くらいから、ぼつぼつと椅子などを並べ始めている会場に、水環境大臣、水環境省の次官が到着。日本大使館中村参事官と、JICAウガンダ事務所長も、相次いで到着。ゆるゆる準備をしていた係りの人たちが、驚いて慌てる中、来賓はさっさと施設の視察を始めてしまいました。

「どうせ来賓は時間通りになんて来るはずがない」とたかをくくっていた(?)人たちのショックはいかばかりか。もしかしてこれが、時間を重視する日本のプロジェクトが引き起こした現象だったとしたら、これもプロジェクトの成果の一つ?!



給水施設の水を汲みあげるポンプの電源供給用のソーラーパネルについての説明を聞く、中村参事官(左より3人目)、水環境大臣(4人目)、水環境省次官(5人目)、JICAウガンダ事務所河澄所長(2人目)

日本でも「動物飛び出し注意」の看板を見かけますが、ここ北部ウガンダでも、犬、猫の他、ニワトリ、牛、ヤギなどの飛び出しには、常に注意が必要です。Atiak-Nimule道路は、南スーダン側の国立公園に近いこともあり、これらに加え、いろいろな野生動物が道路を横断します。新しく舗装を終えたばかりのこの写真の区間、路面についているのは象の足跡です。路肩には新鮮なフンも落ちていました。道路の施工管理をしているコンサルタントから「ここはどうも象が渡るようなので、象横断注意の看板をつけようと思う」と、説明されて、1度は納得したものの、もしも象が渡っていたら看板より先にそっちが目に入るだろうと思ったり。この看板、日本だったら、さしずめ人気の観光スポットになってしまうかも。



Nwoya県Koch Goma郡の、管路給水設備の高架タンクの横に、パパイアの木が生え、スイカが実っていました。そこはタンクからあふれた水が流れる場所。本来ならば、タンクの周りは、きれいに掃除されていなければいけないので、草など生えていないはず、なのですが、設備のオペレーターが食べた果物の種が、この水のおかげで実ったか。これもプロジェクトの副産物?!

本ニュースレターの読者の中には、映画War Danceを見たことがある方もいらっしゃると思いますが、その内戦のさなか、子供たちの教育を守るために、文字通り命を懸けた人たちがいました。ウガンダの学校では小学校を卒業する際に国家試験を受ける必要があり、その成績に基づいて進学も就職も決まります。しかしながら内戦時、ほとんどすべての人が国内避難民キャンプに半強制的に収容され、試験センターとして登録されていたはずの小学校も、試験どころか誰も通うことさえできなくなりました。

この状態を憂慮したPader県の教育官と視学官(学校の運営状態を管理する仕事をしています)の有志が、小学校内小学校の設立と、その試験センターとしての仮認定を行うための運動を始めました。小学校内小学校とは、避難民キャンプ内にある小学校の施設の一部を、避難してきた子供たちの小学校として独立して使用できるようにするものでした。彼らは、キャンプをサポートしているドナーなどにも働きかけ、仮設教室の増設などの協力を得てこの活動を進めました。

そして国家試験。試験問題は隣のKitgum県までは空輸されたそうですが、Pader県はそ

こまで取りに行かねばなりません。この数時間の道のりはゲリラの活動が最も活発なところで、ましてや試験問題を搬送しているとなれば、間違いなくターゲットです。搬送係りに任命された女性の視学官は「私に死ぬというのですか」と教育官に反発しながらも、搬送用の車の準備(教育局は車を持っていないためそこから探さねばなりません)と銃を持った警察官の護衛を要請。しかしここで問題が発生しました。すぐに車を貸してくれると言ってくれたNGOは、そのポリシーで銃を持った人を乗せるわけにはいかない、警官に乗ってもらえる車を待っていると、試験の



内戦時に建てられた仮設教室は、現在でも活用されている。Pader県Papaa小学校。

実施が間に合わないかもしれない。どうするか決めかねた教育官は「ちょっと考える」と言って、そのまま家に帰ってしまったそうです。残された彼女は考えあぐねました。が、時間がたてば経つほど状況が悪くなると判断、教育官の指示を待たずに、そのままNGOの車でKitgumに向かいました。彼女曰く、奇跡的に誰にも止められることなくKitgumにたどり着き、トラックの荷台の底に試験問題を敷き詰め、その上に山盛り古着をのせ、もしもゲリラに出会ったら、古着を渡しながら、しのいでいく戦略で、そのままPaderに引き返したとのこと。何度か危ないタイミングはあったようですが、夕方までには無事に帰りつき、「どうやって行くか決めてくれたか?」と深刻にたずねる教育官に、すでに持って帰ってきたことを告げて初めて、自分がどれほど緊張していたかを認識したそうです。この彼女、今はAgago県の視学官として働いて、我々の小学校施設建設プロジェクトにもご協力いただきました。まだまだ課題の多い北部ウガンダの教育事情ですが、子供たちのために、本当に頑張っているこういう人たちと一緒すると、「北部ウガンダ、まだまだ行ける!」という希望が湧いてきます。